

障害部門

「障害」に関する教育心理学的研究の年間動向

——自閉症研究を中心として——

加藤哲文
(筑波大学・心身障害学系)茨木俊夫
(埼玉大学・教育学部)

はじめに

本稿では、「障害」に関する教育心理学的研究の年間動向（昭和62年度）を把握することを目的とし、特に筆者らの専門研究領域である「自閉症」に関する動向について詳述する。さらに、研究方法論などに関する若干の考察を加える。なお、引用した文献は、学会発表論文集については昭和62年度のものであり、その他の雑誌、書籍などは昭和61年7月から昭和62年6月の間に発表されたもの（以下、「今年度」と記述する場合は、この期間に発表されたものとする）である。

1 一般的な動向

まず、今年度の研究動向を数的に把握するために、「日本教育心理学会発表論文集（昭和62年度、および昭和61年度）」、「日本特殊教育学会発表論文集」、および「日本心理学会発表論文集」における障害別発表数をTABLE 1に示す。これを見ると前報（山下、1986）同様、「精神遅滞」と「自閉症」に関する発表が圧倒的に多く、また、近年の傾向として「学習障害」および「聴覚障害」が比較的多くなってきてている。次に、教育心理学会内での動向を前報（山下、1986）と比較すると、

TABLE 1 今年度の障害別発表数（かっこ内は%）

障害名	教心('86)	教心('87)	特教	日心
盲・弱視	1(1.7)	3(6)	18(5.8)	0(0)
聴覚	8(13.8)	2(4)	32(10.3)	0(0)
言語	5(8.6)	7(14)	28(9.0)	1(3.2)
運動	2(3.4)	2(4)	24(7.7)	1(3.2)
精神遅滞	16(27.6)	10(20)	77(24.8)	12(38.7)
ダウン症	4(6.9)	5(10)	16(5.2)	1(3.2)
自閉症	12(20.7)	11(22)	44(14.2)	2(6.5)
学習障害	3(5.2)	3(6)	12(3.9)	6(19.4)
重度・重複	7(12.1)	5(10)	29(9.4)	0(0)
病虚弱	0(0)	1(2)	11(3.5)	4(12.9)
てんかん	0(0)	1(2)	3(1)	0(0)
心因性障害	0(0)	0(0)	5(1.6)	3(9.7)
全般	0(0)	0(0)	11(3.5)	1(3.2)
合計	58(100)	50(100)	310(100)	31(100)

教心：教育心理学会、特教：特殊教育学会、日心：日本心理学会

「聴覚障害」と「精神遅滞」が若干減少したのを除き、ほぼ同傾向を示している。

なお、学会誌および紀要の論文に関しては、各障害が同じ条件で掲載可能で、かつ障害に関する論文が比較的多く掲載されている学術雑誌として「教育心理学研究」および「特殊教育学研究」を、紀要では「国立特殊教育総合研究所研究紀要」および「筑波大学心身障害学研究」を取り上げる。この4誌の今年度（昭和61年7月～昭和62年6月）に発表された障害別論文数は、TABLE 2に示すとおりである。まず、今年度の「教育心理学研究」をみると、全47編の論文の内、「障害」に関するものはわずか4編（8.5%）であり、同時期の学会発表数（50, 9.4%）に比べわざかに少ないといえる。また、「障害」の専門誌である「特殊教育学研究」における障害別の発表数では、「精神遅滞」と「聴覚障害」が多く、同時期の学会発表論文数の割合とほぼ同傾向（TABLE 1）といえよう。さらに、2つの研究機関の紀要の傾向を見ると、「精神遅滞」、「自閉症」および「聴覚・言語障害」が比較的多く、TABLE 1の結果とほぼ同傾向と言えよう。

以上のように、今年度もここ数年とほぼ同じ様な障害別研究数の傾向がみられたが、これが、ここ数年における量的動向をある程度反映するものなのかどうかは明ら

TABLE 2 障害別研究論文数

障害別	教心	特教	特総	筑波
盲・弱視	2	2	1	
聴覚		5		3
言語		1	2	2
運動	1	1	1	
精神遅滞		7	2	2
ダウン症		2		1
自閉症	1	2	3	2
重度・重複		1	1	
病虚弱		3		
てんかん		1		
合計	4	25	10	10

教心：教育心理学研究、特教：特殊教育学研究、特総：特殊教育総合研究所紀要、筑波：筑波大学心身障害学研究

教育心理学年報 第27集

かにはならなかった。したがって、今後は、学会や専門誌の多様化や、近接領域の研究とのクロスオーバー化など多くの要因を分析する必要がある。

2 自閉症研究の動向

次に、「自閉症研究」に焦点を絞り、今年度の動向をより詳細に検討する。

1) 全体的傾向

ここでは、今年度の動向をみるために、自閉症に関する研究を発表数が比較的多い次の4学会の発表論文集(1987年度)の中から取り上げ、研究領域、方法論などに関する傾向を数量的に把握する。すなわち、「日本教育心理学会」(11件)、「日本特殊教育学会」(44件)、「日本心理学会」(2件)および「日本行動療法学会」(5件)の計62件を対象とする。TABLE 3は研究領域別の発表

TABLE 3 研究領域別発表件数

研究領域	発表件数(%)
指導・訓練	29 (46.8)
行動観察	10 (16.1)
事例報告	6 (9.7)
行動評定・心理検査	10 (16.1)
基礎実験(神経・生理)	5 (8.1)
基礎実験(心理)	2 (3.2)
合計	62

TABLE 4 「指導・訓練」領域における研究方法

	発表件数
条件分析	2
少数事例実験法	10
実験的事例報告	10
事例報告	7
合計	29

TABLE 5 被験者の年齢別発表件数*

就学前	36
小学	42
中学	15
高校	6
青年・成人	5
不明	1
合計	105

など数量化できる測度を使った事例報告を示している。また、「事例報告」とは指導経過の記述、あるいはエピソードの記述を示す。結果は、少数事例実験法や実験的事例報告が多く、指導・訓練手続とともに、結果に関する客観的記述をめざした研究が多いことを示すものである。

* 事例はすべて算出。ただし、調査など多数の被験者の場合は、その代表的年齢を1として算出した。

TABLE 6 研究目的別
発表件数

学習(基礎)	1
学習(応用)	5
感覚・知覚	5
言語(コミュニケーション)	16
発達	5
自閉的(病理的)行動	14
問題行動	4
動作・運動	7
社会的行動	1
ADL・作業活動	4
	62

ろう。

次に、全62件が対象としている被験者の年齢別発表件数を TABLE 5 に示す。これを見ると小学校以前の比較的年少児を対象とした発表が最も多く、一方、青年・成人期は少ない。

最後に、全62件の発表を研究目的別に分類したもののが、TABLE 6 である。ここでは便宜的に10項目に分類したが、最も多かったのが「言語(コミュニケーション)」と「自閉的(病理的)行動」を扱った発表である。前者は、自閉症のみならず他の障害においても重要なテーマであり、また、後者は生活場面などの積極的ニーズによるものであろう。

2) 研究目的別動向

ここでは、TABLE 3 および TABLE 6 に示した研究領域・目的(対象)の項目を中心として、今年度の動向を主要な学会誌、研究紀要、学会発表論文集および書籍などから概観する。

(1) 全体的研究動向

東條(1987)は、過去20年間の自閉症研究の動向を明らかにするために、いくつかのデータベースから、“autis”あるいは“自閉”で始まる文献を集めた。その結果、最も高頻度で掲載されている雑誌は「Journal of Autism and Developmental Disorders」誌であり、ついで、わが国の「児童青年精神医学とその近接領域(児精医誌)」誌であった。そして、関連文献の定量的分析の結果、自閉症の研究は、心理学と教育学の領域で増加の傾向があり、「言語」や「行動」の問題や「学校教育」に関する研究が年々重視されていること、また、近年は弱視×染色体との関連や、青年期・成人期の問題に关心が向けられている傾向にあるという。一方、前述した今年度のわが国の動向を見ると、世界的にも多くの関連文献を掲載してきた「児精医誌」の今年度の自閉症研究の掲載は1件のみであった。これは、わが国の自閉症に関する医学的研究(基礎を含む)が医学系の専門誌に掲載されることが多く、例えば、「J. of Autism」誌のような総合的専門誌がないためと思われる。また、心理学的領域においても基礎的実験研究が少なく、同時期の欧米と異なっている。さらに「青年期・成人期」における研究も伝統的に行われてきた「精神薄弱研究」に包括された形での研究から脱皮できず、この領域の研究のたち遅れをもたらしているといえよう。

(2) 基礎的研究(生理・神経学)

伊藤（1987）は、従来から自閉症児の眼球運動特性を独自に開発したアイカメラを用いて測定してきたが、今回は、EOG (Electro-Oculography) とアイカメラの同時測定を行うことで、両者の測定精度、分析方法を検討した。その結果、両者にはそれぞれ長所と短所があり、実験対象、目的に応じて使い分ける必要性を指摘している。また、氏森らの研究グループ（氏森ほか、1987；田口ほか、1987）は、自閉症状と自律神経系の生理的指標（指先容積脈派、皮膚電位反応、心電図）との間の関連性について検討している。さらに、米村・吉田（1987）は、自己刺激行動と覚醒水準との関係を、心拍数という生理指標を用いて継続的に検討している。いずれの研究でも、治療教育の場に生理的情報をどのように位置づけるかという問題の検討はまだ不十分であるが、今後もこのような基礎的な研究の重要性は高まるものと思われる。

(3) 基礎的研究（心理学）

今年度、自閉症を対象とした基礎的な心理学的研究は少ない。園山・小林（1986）が、「刺激の過剰選択性」に関する実験を、加藤・小林（1987a, 1987c）が、クロスモダル転移事態における刺激フェーディングおよび時間遅延法の効果を検討している。また、山本（1986）は、自閉症児の「刺激等価性」の成立条件を検討するために、恣意的見本合わせ訓練を用いて実験を行っている。以上の各研究は、いずれも「行動分析学」の枠組みで行われたもので、緻密な実験手続のもとで、弁別行動を維持しているパラメータを同定しようと今後も、継続研究並びに追試が待たれる領域である。

(4) 発達評価・行動評価

伊藤ほか（1987 a）は、1歳6か月児検診で自閉症および言語発達遅滞のリスク児としてスクリーニングされた3名に早期療育を行い、特に遊びの発達過程を2歳4か月まで観察した。その結果、療育経過と遊びの発達経過の間に一定の関連性を見いだしている。また、その際に、Ainsworth, M.D. らの実験的行動観察方法を参考にして、母子関係、社会的行動、伝達行動などの分析を行っている（伊藤ほか、1987 b）。

また、大井・岡田（1986）は、自閉的行動特徴と心理的能力障害との関連を検討するため、新版K式発達検査の成績のクラスター分析を行っている。対象児はDSM-IIIにより幼児自閉症およびその残遺状態と、autistic-like の2群に分類された57名であった。その結果、能力障害という点では両群は共通性が示されたが、「シンボル操作」と「社会的分脈の知識」に関して前者の方が劣っていた。

大柴ほか（1987）は、リスク児を発見するための基礎資料を得るために、自閉症児の乳幼児期の発達様相を母

親へのアンケート（回想）で調査している。この結果、睡眠・抱きにくさの問題、アタッチメントの弱さ、模倣や指さしの発達の弱さが乳幼児期の自閉症発見の手がかりになるとしている。

また、中塚・藤居（1987）は、「N.F式発達障害児診断検査（自閉傾向測定尺度）」の開発にむけて基礎的な研究を行っている。今までにも多くの自閉症状に関するチェックリストが開発されているが、単なる鑑別診断のためではなく、治療教育に実用的な情報を与えてくれる検査の開発が望まれる。このような観点から、ショプラー、E. らの「教育診断検査（心理教育プロフィール）」が茨木・三宅（1979）によりわが国に紹介されてきたが、今年度、全面改訂版（ショプラー、E.・茨木、1987）が出されている。この改訂版は、従来のような原典の翻訳ではなく、わが国の健常児を用いた再標準化や、検査器具の開発、両国の執筆者の共著となっているため、文化の違いによる不都合がなくなり、適用しやすくなっている。

(5) 自閉的・病理的問題行動

一般に、「自閉的」といわれる行動群は様々であり、どれが共通的に見られるものかは明確ではない。また、これらは場面によって選択的にみられることもしばしば報告されていている。太田ほか（1987）は、4名の自閉症児についてそれが所属する集団（特殊学級あるいは養護学校）における学級内行動を系統的に観察している。また、子どもの行動だけではなく、担当の教師の行動も観察しており、問題行動に関連して両者の相互作用を測定することも意図している。対象とした行動は「自己刺激」「自傷」「離席」「他傷」などであり、それぞれの問題行動を維持している要因分析や、教師の適切な関わり方が学級という自然な分脈の中で検討されている。また、問題行動の消去技法を検討しているものとして、幸地ほか（1987）や内田（1986, 1987a）がある。幸地ほかは、自傷行動を維持している要因の分析を「感覚消去」（法）をパラメーターとして行っている。また、内田は、自己刺激行動をその維持要因から全身性と限局性とに分け、それぞれの行動の消去に適した2種類のDRA（拮抗行動の分化強化）手続を提案している。

(6) 言語（コミュニケーションスキル）

このテーマは、従来から自閉症研究の中で量的にも多く、他の障害分野とも密接に関連している領域の1つと言えるだろう。ここでは、「前言語的コミュニケーション」、「機能的言語」、「非言語的コミュニケーション」といった分野を中心に概観する。

健常幼児の発達過程を参考としていわゆる「前言語的コミュニケーション」を重視する研究は、従来から多く

みられていたが、今年度はほとんど見られなかった。わずかに、川崎ほか（1987）は、発話行動と指さし行為との関連性について、56名の自閉症児に津守式乳幼児精神発達質問紙を用いて検討した。その結果、指さしと発話の継起順序は、健常児と異なり、発話（一語発話）が指さしに先行する例が多いことをみいだした。また、いわゆる「折れ線現象」は、指さしの出現しない段階における発話の消失の場合が多く、この問題をシンボル機能との関連で考察している。

また、綿巻（1987）は、学齢期の自閉症児の指さしと象徴的身振り動作の理解と表出をみるために、一定の訓練を行った後にこれらの獲得レベルを観察した。その結果、その修得レベルには個人差があり、その問題を自閉症児の非言語的シンボルの発達の障害から考察している。以上の研究は、主として「指さし」をコミュニケーションにおける叙述的機能という点から検討したものであるが、もう1つの重要な機能として「要求」という機能がある。ここ数年、機能的で実用的な言語行動として「要の反応求言語行動」が研究対象になることが多いが、その1つ型として「指さし」が標的とされている。中村・原野（1987）は、非言語的反応型（指さし）を用いて「要求」という機能を形成した後に、音声言語的反応型（発声・発語）に同一機能を移行していく訓練を行った。また、同様に「要求」という機能を形成するための指導技法や訓練プログラムが報告されている。加藤・小林（1987b）は、言語レベルの異なる自閉症児に「時間遅延法」を用いて2～3語文による要求言語を形成した。また、その際に適切な手続の検討も行っている。また、山本（1987）は、大人からの言語反応を要求する言語行動として、「おしえてください」を形成し、その維持および般化を促進するための必要条件を検討している。彼の研究では単一の言語反応を形成するのではなく、環境条件によって適切な反応クラスを使い分けることを可能にするために、複数の反応クラスを形成している。同様の観点から望月ほか（1986）は、聾精神遲滞者を対象として、複数の反応モードを教授して、場面に適切なモードを使い分けられるような訓練を行っている。このように、今年は、言語行動の反応型の形成よりも生活場面での機能化を想定した訓練的試みが多くみられている。さらに、加藤ほか（1987）は、叙述の真偽を問う質問に対する「ハイ－イエ」反応の形成を、また、大野ほか（1987）は、「チョウダイ－アリガトウ」反応連鎖の形成を試みている。これらの研究は、単に訓練経過を報告しているのではなく、これらの標的反応を形成するために有効な訓練条件の分析を行っている。

その他、小山（1987）は、無発語自閉症児に対して、

「カタカナ文字」を利用したコミュニケーション指導の事例報告を行っている。これは症児のカタカナへの固執傾向を生かして日常場面でのコミュニケーションの形成に成功している。また、大井ほか（1987）は、無発語自閉症児に対して2事物からなる言語指示（～と～をおいて）に従う行動を形成するための訓練を行った。いくつかの訓練手続を用いたが、最終的には子どもの自発する事物への指さしが見られるにともなって課題が達成された。ここでは視覚刺激（指さし）がプロンプトとして機能したと考えられるが、さらに、訓練以外の事物への般化や維持などの効果も測定する必要があろう。

以上のように、言語領域では、指導・訓練を主とした研究が多い。しかし、自閉症の病理的言語反応の分析や訓練技法に関する基礎的研究も質・量ともに充実する必要があろう。

(7) 生活習慣スキル・社会的行動

まず、生活習慣に関するスキル（ADL）に関する研究について概観する。ここではそれぞれの行動を形成するための訓練プログラムの紹介と実践が中心となっている。標的とされる行動は様々で、排泄行動（谷・佐久間, 1987; 内田, 1987b), 肥満の改善（伊藤・古賀・大隅, 1987), 朝のルーチン行動（新井, 1987), 鼻かみ行動（志賀, 1987), ごみ捨て行動（三苦, 1987a) などである。特に、新井、志賀の研究は、単一の行動を形成するのではなく、他の行動連鎖の中に標的行動を組み込むことによって、日常場面での汎用性や実用性を考慮したプログラムを提案している。

社会的行動の代表的なものは、言語行動であるが、ここではそれ以外の行動について述べる。中村（1987）は、情緒発達という視点から「手つなぎ行動」に着目し、情緒発達の指標として有効であると述べている。そして、この行動が観察可能な指導方法改善の一助として用いられるなどを推奨している。社会的行動の具体的な指導例としては、「遊び」の指導（三苦, 1987b; 宮崎・末松, 1987) や自閉症児どうしの関わり方のスキル（三苦, 1986) が報告されている。

(8) 指導・訓練方法、プログラム

まず、行動療法的アプローチとしては、竹花・竹花（1987）が課題学習のプログラムを示し、症例を通して検討している。プログラムと訓練手続は従来のアプローチと類似しており、訓練効果の評定についても訓練で課題とされたものに限定されている。また、牟田（1987）はポーテージプログラムを自閉症児に適用した場合、言語領域の課題や自閉的行動の対処などに問題があり、このプログラムの適用の限界を指摘している。

以上のような従来からの行動療法的アプローチの方法

論上の問題点として、杉山（1987）は、形成された行動の般化・維持の困難性、自発性の問題などを指摘した後に、別のアプローチを提案している。すなわち、「フリーオペラント法」といわれるアプローチで、訓練者や親の統制力を極力弱くしながら訓練を進めようとするものである。しかし、このアプローチも実証的データの不足や訓練効果の評価法の問題などが残されていることを指摘している。一方、別のアプローチとして、「動作法」や「ムーブメント法」がある。動作法は様々な障害に適用されており、その有効性も多く症例研究から示されてきている（例えば、障害児臨床センター、1986）。そして、自閉症児への適用も比較的多い。渡辺ほか（1987）は、動作訓練の効果を筋電図と皮膚電気反応を指標として検討している。従来、動作法の評価は、今野（1986）などのように変容過程のエピソード的記述とその認知的解釈という方法をとっている。今後、渡辺らの試みのように客観的指標を導入することで訓練効果の科学的分析が期待できる。

また、水泳指導（荒井・小林、1987）やその他の運動課題（木村・小林、1987）によるムーブメント法も、訓練効果の評価が今後の重要な課題となろう。それは、直接訓練を行った運動レベルの変容と、その他の言語・認知レベルの変容との関連性が推測の域をはず、実証的ではないからである。いずれの研究もその訓練法の効果を過大評価することなく、着実に実証的なデータを積み上げていく必要がある。

その他、自閉症の治療教育に関するあらゆる方法論を平易に紹介する目的で出された著作（全日本特殊教育研究連盟編、1986）があるが、個人差が大きい自閉症児にどの方法を選択するかという本質的な問題点にはふれられていないのが残念である。

(9) 追跡研究

石川ほか（1986）は、学齢前に課題学習や集団指導を行った自閉症（通所群）のうち中学生以上になった56名と、指導を受けなかった41名の対照群とを統計的に比較した。その結果、通所群は高知能を維持していたが、対照群はIQ35以下の者が多かった。また、通所群は対照群に比べて、言語表出、問題行動、社会適応などの面で良好であった。そして、これらから学齢前の通所指導の有効性を示唆している。

また、佐竹ほか（1987）と中矢ほか（1987）は、学齢前に主として行動療法的個別指導を受けた4～5名の中学期の学校適応に関する追跡調査を行っている。佐竹らの群は普通学級在籍群、中矢らの群は特殊学級または養護学校在籍群である。彼らは、就学後毎年追跡報告をしているが、石川らと異なり症例研究の方法をとっている。

その結果、学校や家庭場面での変容過程を詳細に測定・観察している。

しかし、いずれの研究においても学齢前から中学期以降との間の長期にわたる変容過程を単純に就学前の指導効果として結論づけるのは困難であろう。両者の方法論を生かした多面的アプローチが必要である。

(10) 青年期・成人期の教育的リハビリテーション

今年度に刊行された書籍で特徴的なのは、青年・成人期の自閉症者に関するものが多く発表されたことである。まず、訳書ではアメリカ・ノースキャロライナ大学のショプラー、E. らやディメイヤーの著作（ショプラー E.・メジボフ G. B. 編、1987 a, b; ディメイヤー M. K., 1987）がある。これらは、家庭の問題、自閉症者を取り巻く地域社会での問題点やその解決策などが系統的に紹介されており、わが国においても参考になる点は多々あるといえる。一方、わが国の著書は未だ少なく、この領域の研究の立ち遅れが指摘される。わずかに、神奈川県児童医療福祉財団（1987）の研究紀要では、欧米の地域ケアシステムの紹介から、わが国での実践例も紹介されており、貴重な文献といえよう。また、自閉児教育研究会編（1986）は、青年期・成人期における教育的評価法を紹介しており、どのような観点から青年期・成人期の問題を考え、教育プログラムを開発していくかについてのヒントを与えてくれるだろう。特に、この文献では前述のショプラーらの AAPEP（青年期・成人期心理教育プロフィル）が翻訳されており、わが国における適用が検討されている。今後は、わが国の自閉症児・者の学校教育終了後の処遇に関する実態調査（加藤・木村、1987）などを利用して、評価法とそれに対応する教育プログラムの開発が望まれる。

(11) その他

異色の著作として、ティンバーゲン夫妻の「改訂・自閉症・治癒への道」という訳書がある（ティンバーゲン・ティンバーゲン、1987）。これは、前作をさらに発展させたもので、彼らの自閉症の心因論を支持する考え方は変化していない。しかし、自閉症児をもつ親や、彼らを取り巻く人々をいたずらに混乱させるような記述は、学術的に批判されるべきであろう。

引用文献

- 新井利明 1987 発達障害児の行動変容（IV）—スケジュール表を用いた日課の指導— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集、492—493.
- 荒井正人・小林芳文 1987 障害児のムーブメント教育に関する研究—水による自閉症児の10年間における治療実践経過— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文

教育心理学年報 第27集

- 集, 444-445.
- ディメイヤーM. K. 1987 自閉症と家族—青年篇
久保紘章・入谷好樹(訳) 岩崎学術出版社
- 石川道子・斎藤久子・今橋寿代・和田義郎 1986 自閉症児の長期観察例について 小児の精神と神経, 26(4), 23-30.
- 伊藤紀子・古賀靖之・大隅絢子 1987 自閉症児の親訓練—肥満の治療— 日本行動療法学会第13回大会発表論文集, 24-25.
- 伊藤英夫 1987 自閉性発達障害児の眼球運動—自閉児用アイカメラシステムと EOG の同時測定の試み— 東京学芸大学特殊教育研究施設報告, 36, 73-81.
- 伊藤英夫・野村東助・高橋道子・松田景子 1987 a 早期幼児期からの自閉症児の発達に関する継続的研究(1)—1歳6カ月から2歳4カ月までの遊びを中心に— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 968-969.
- 伊藤英夫・野村東助・伊藤良子・長崎勤・長瀬又男・高橋道子・松田景子・斎藤晃・尾形和男・木原久美子 1987 b 自閉症児の早期発見・早期療育システムの開発に関する研究 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 496-497.
- 神奈川県児童医療福祉財団小児療育相談センター 1987 家庭を中心とした療育プログラムの検討
- 加藤哲文・小林重雄 1987 a 自閉症児の継時弁別学習における刺激性制御の転移—クロスモダル転移事態における時間遅延条件の比較— 日本行動分析学会第5回大会発表論文集, 5-6.
- 加藤哲文・小林重雄 1987 b 自閉症児の機能的言語行動の形成のための訓練パッケージの開発(1)—要求言語行動形成のための時間遅延法の適用— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 452-453.
- 加藤哲文・小林重雄 1987 c 自閉症児の継時弁別学習における刺激性制御の転移特性—刺激フェーディング手続きによるクロスモダル転移について— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 972-973.
- 加藤哲文・小林重雄・笹田俊樹 1987 自閉症児の機能的言語行動の形成のための訓練パッケージの開発(2)—時間遅延法による Yes-No 反応の形成— 日本行動療法学会第13回大会発表論文集, 26-27.
- 加藤義男・木村 真 1987 自閉症児(者)の処遇に関する横断的研究 発達障害研究, 9, 65-74.
- 川崎葉子・清水康夫・小熊順子 1987 自閉症の発語と指さし行為の出現 発達障害研究, 8(4), 56-65.
- 木村幸恵・小林芳文 1987 自閉症児のムーブメント教育に関する臨床的研究—motor imitation を高めるためのアプローチ— 日本特殊教育学会第25回大会発表
- 論文集, 446-447.
- 今野義孝 1986 発達障害児に対する動作法の展開—身体への能動的な働きかけによる自己の確立— 文教大学教育学部紀要, 20, 20-23.
- 幸地 孝・藤原義博・森島 慧 1987 自傷行動に対する感覚消去手続きの分析—防護用具の随伴・非随伴的使用における効果の検討— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 490-491.
- 三苦由紀雄 1986 自閉児のリレーションスキルの指導 自閉児教育研究, Vol. 9, 23-32.
- 三苦由紀雄 1987 a 自閉児の行動形成—家庭でのゴミ捨て指導— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 484-485.
- 三苦由紀雄 1987 b 自閉児の遊びの指導 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 974-975.
- 宮崎 真・末松陸士 1987 一自閉児の遊戯課題遂行に関する検討 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 476-477.
- 望月 昭・野崎和子・渡辺浩志 1986 聾精神遲滞者における要求言語行動の獲得—複数モードの使用のためのプログラム—聴覚言語障害, 15(4), 133-145.
- 牟田悦子 1987 自閉的傾向をもつ発達障害児へのポーテージプログラムの適用について 一事例研究—日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 980-981.
- 中村哲雄 1987 自閉症児の対人関係回避行動の改善方法—「手つなぎ」行動への注目— 琉球大学教育学部紀要, 30, 第2部, 367-373.
- 中村義行・原野文子 1987 自発行動レポートリーに着目した伝達行動の指導について(Ⅲ) 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 450-451.
- 中塚善次郎・藤居真路 1987 N F式発達障害児診断検査(自閉傾向測定尺度)の妥当性(1) 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 542-543.
- 中矢邦雄・杉山雅彦・前川久男・小林重雄 1987 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅷ(2)—特殊学級および養護学校の自閉症児について— 筑波大学心身障害学研究, 11(2), 35-41.
- 大井 学・岡田 謙 1986 自閉症児およびそれに似ている子どもの発達状態について 児童青年精神医学とその近接領域, 27(5), 273-285.
- 大井 学・西川郁子・田中真留実 1987 話すことばをもたない自閉症児の言語理解—2語結合の理解における視空間的支えの効果— 特殊教育学研究, 24(4), 51-58.
- 大野裕史・進藤桂子・柘植雅義・溝上浩一・山田千枝・吉元英志・三浦 剛 1987 発達障害児における「ち

- 「ようだい」-「ありがとう」言語連鎖の形成 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 532-537.
- 大柴文枝・東篠吉邦・武居孝男・平井 保 1987 自閉的な子どもの早期教育に関する基礎研究—早期徵候の視点からの事例による考察— 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 14, 125-134.
- 太田俊己・小塩允護・石井詩都夫・近藤明子・緒方登士雄・篠原吉徳・宮崎直男 1987 自閉を伴う精神遅滞児の学級内行動(1~6) 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 130-135, 160-165.
- 小山 創 1987 話しことばのない自閉児のコミュニケーション手段—カタカナ文字使用までの縦断的検討— 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 14, 117-124.
- 佐竹真次・園山繁樹・前川久男・小林重雄 1987 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅲ(1)—自閉症児の普通学級適応についての検討— 筑波大学心身障害学研究, 11(2), 25-33.
- 障害児臨床センター 1986 動作療法 障害児臨床シンポジアム1, 九州大学教育学部
- ショプラー, E.・茨木俊夫 1987 自閉児・発達障害児教育診断検査 川島書店
- ショプラー, E.・メジボフ, G. B. 編 1987 a 自閉症児と家族 田川元康(監訳) 黎明書房
- ショプラー, E.・メジボフ, G. B. 編 1987 b 青年期の自閉症—個人生活の確立 中根 晃・太田昌孝(監訳) 岩崎学術出版社
- 志賀利一 1987 スキル獲得の効率と効果の検討 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 470-471.
- 園山繁樹・小林重雄 1986 自閉症児と健常児における刺激の過剰選択性—視覚複合刺激の差による効果— 行動療法研究, 12(1), 62-72.
- 杉山雅彦 1987 自閉児への行動療法的アプローチ—新たな展開とその問題点— 特殊教育学研究, 25, 43-48.
- 田口直子・矢島卓郎・氏森英亜 1987 自閉傾向児の聴覚刺激に対する反応(Ⅲ)—有意味・無意味音声刺激に対する自律系および行動反応— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 522-523.
- 竹花正剛・竹花裕子 1987 自閉症児の課題学習訓練に関する検討—課題の達成度の評価— 日本行動療法学会第13回大会発表論文集, 28-29.
- 谷 晋二・佐久間徹 1987 重度自閉症児のトイレットトレーニング 日本行動療法学会第13回大会発表論文集, 30-31.
- ティンバーゲン, N.・ティンバーゲン, E. A. 1987 改訂 自閉症・治癒への道 田口恒夫(訳) 新書館
- 東篠吉邦 1987 自閉症に関する研究のアプローチとその推移—データベースを利用した分析を中心に— 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 14, 109-116.
- 内田一成 1986 自閉症児の行動療法における般化と維持の規定要因としての自然的強化隨伴性 道都大学紀要(社会福祉部), 9, 73-82.
- 内田一成 1987 a 自閉症児の全身性自己刺激行動と限局性自己刺激行動に及ぼす artificial DRA と natural DRA の臨床効果 行動療法研究, 12(2), 34-49.
- 内田一成 1987 b 青年期の1自閉症例に対する昼夜排泄コントロール訓練 日本行動分析学会第5回大会発表論文集, 9-10.
- 氏森英亜・生井祥子・田口直子・矢島卓郎 1987 一自閉症児の純音および呼名刺激に対する反応—自律系および行動反応の経年的変化— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 524-525.
- 綿巻 徹 1987 自閉症児における指さしと象徴身振り 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 976-977.
- 渡辺節夫・緒方登士雄・篠原吉徳 1987 自閉症児に対する動作法による訓練経過一波形測定からみた変容について— 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 482-483.
- 山本淳一 1987 自閉児における教示要求表現の形成 教育心理学研究, 35, 97-106.
- 山本淳一(1986) 自閉児における刺激等価性の形成 行動分析学研究, 1, 2-21.
- 山下 熊 1986 わが国における障害児に関する教育心理学的研究の年間動向 教育心理学年報, 25, 126-136.
- 米村あゆみ・吉田一誠 1987 自閉症児にみられる自己刺激行動と自律神経系の覚醒水準の関係についての検討 日本行動療法学会第13回大会発表論文集, 38-39.
- 全日本特殊教育研究連盟(編) 1986 自閉児指導のすべて 発達の遅れと教育, 7月号臨時増刊, 日本文化科学社
- 自閉児教育研究会 1986 青年期・成人期自閉症の評価 自閉児教育研究, Vol. 8.